

# 漢字書体の唯物論

亀澤孝幸

## 一 漢字書体の謎

漢字に楷書や行書や草書といった書体があるのは周知のとおりです。しかし、なぜ書体は複数存在するのでしょうか。また、書体は何をきっかけにして変化するのでしょうか。また、ある時期を境に、書体の変化が止まってしまったのはなぜでしょうか。こうした漢字の書体をめぐるさまざまな謎について、書写メディアを中心に唯物論的観点から考えてみたいと思います。

このように唯物論 (materialism) とは、ある対象について、物質 (material) の次元で考える態度であり、方法です。書体の生成や変化には、さまざまな要因が複雑に働いています。政治的な力は、そのひとつです。たとえば、秦の始皇帝の文字統一は、政治的な強制力によって書体の変化がおこった例です。現代中国で使われている簡体字も、国民のリテラシー向上を目指した国家的文教政策として、伝統的な楷書の字体を大胆に簡略化したものです。しかし、物質の

次元に焦点を合わせ、それ以外の要因を一旦括弧に入れることによって、書体の様式的特徴を根本的に規定しているものが見えてくるのではないかと思います。

文字を書きしるすためには、何らかの媒体 (medium, media) が必要です。漢字といえば、紙に筆と墨で書かれた書の姿を思い浮かべる人が多いでしょう。しかし、漢字書体変遷の歴史から見ると、紙は新しいメディアです。紙が主要な書写媒体として普及するのは、およそ三国時代、三世紀頃のことです。最古の確実な漢字資料である殷代後期の甲骨文は紀元前一四世紀中頃にあらわれたので、紙以前と紙以降とで、漢字の歴史はおおよそ二分することができます。漢字の歴史の前半は、紙のない時代です。そのあいだ、文字はさまざまなものに書きしるされました。

漢字の書体は、大きくいって、篆書、隸書、草書、行書、楷書の五つに分類されます。これらを基本五書体と呼びます。各書体にはさまざまなバリエーションがあります。基本五書体はカテゴリーの

## 基本五書体の変遷

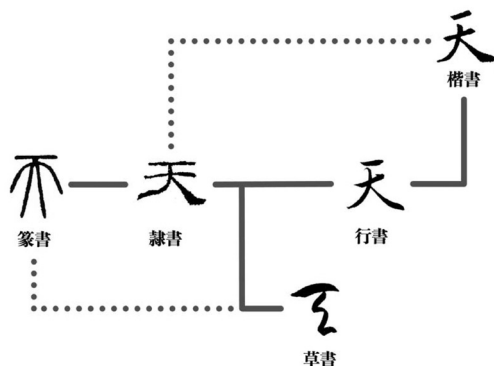


図 1

ようなもので、それぞれに属する書体が複数存在します。広義の篆書は、隸書以前の書体の総称であり、甲骨文や金文を含む呼び方ですが、狭義の篆書は、中国統一後の秦が定めた小篆を指します。小篆は、殷周金文を祖型として、長い時間を経たのちに、篆書の典型として確立した書体です。したがって、篆書がいつ確立したかといっても、その祖型の成立と、典型の確立までのあいだに、長い時間の幅があります。このことは、その他の書体についても当てはまりま

す。

これら基本五書体の変遷過程を図1に示しました。ここでは注意してほしいのは、楷書を崩して行書ができ、行書を崩して草書ができたと考えるのは誤解だということです。実際はその逆に、隸書からまず草書が生まれ、つぎに行書、そして最後に楷書が成立しました。

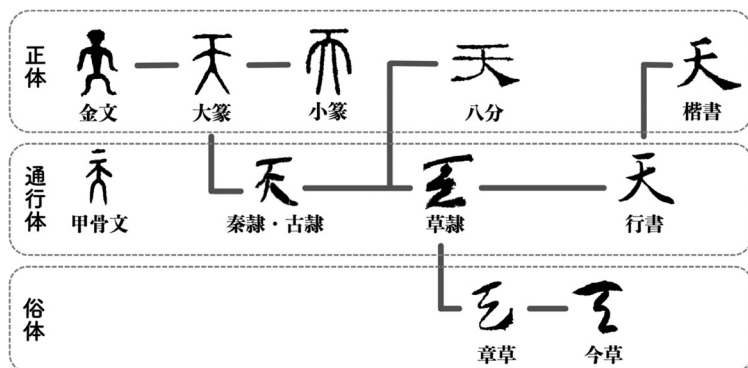
そして、不思議なことに、楷書をもって漢字書体の変遷は止まってしまう。印刷書体やデジタルフォントを別とすれば、楷書の成立以降、今日に到るまで、新しい書体は生まれていません。われわれが標準書体として使っているのも楷書ですね。楷書は漢字の最新書体であり、最終形態でもあるのです。

## 二 書体の階層性

以上の基本的な流れを踏まえた上で、より詳しい書体の変遷過程を示したのが図2です。この図で重要なのは、書体には、正体せいだい（正式書体）、実用書体である通行体や俗体——通行体と俗体の区別は曖昧ですが——といった階層性があり、いつの時代でも、複数の書体を目的や用途に応じて使い分けることが常態であるということです。

それは、殷代においても当てはまります。殷の文字資料といえは、まさきに甲骨文を思い浮かべることでしょう。つぎの西周では金文の全盛期を迎えるため、ややもすると、殷代甲骨文から西周金文へと字体が変化したかのようにとらえられがちですが、これは誤りです。

というのも、殷代後期には、甲骨文と並行して金文も存在していたからです。金文とは、青銅器の表面に鑄込まれた文字です。青銅器は、粘土で作った型に溶かした青銅を流し込み、冷やして固めることによって作られます。銘文も粘土の型で作られるため、肥瘦や曲直といった文字の細かな整形が可能です。



ちなみに、金文は凹文（陰文）としてあらわされるため、型は反転した凸文（陽文）で作られることとなります。青銅器の内壁の曲面に沿うように凸文の粘土の型をどのように作るのか、長年謎のままでした。ここではふたつの説を簡単に紹介しておきます。ひとつは、松九道雄氏の唱えた説で、まず動物の皮に文字を彫り、それを粘土の型に押しつける方法です。もうひとつは、近年、山本堯氏らによって出された説で、水で溶いた粘土

を塗り重ねて文字を凸文にあらわす方法です。② いずれにせよ、可塑性の高い粘土で型を作るわけですから、細かい調整が可能です。

他方、甲骨文は、硬質な亀の腹甲や牛の肩甲骨に鋭い彫刻刀で刻みつけた文字ですから、肥瘦や曲線の表現が難しい。いきおい、文字は鋭く細い直線だけで構成され、簡略化されることになります。たとえば、図3は〈王〉という字を甲骨文と金文とで比較したものです。〈王〉という字は、王の権力を象徴する鉞（まさかり）をかたどった象形字です。金文では鉞の下部の刃が太く塗り込められた肥筆によってあらわされています。甲骨文ではこのような表現ができないため、刃の部分を直線の組み合わせによって代替していることがわかります。

図3 甲骨文と金文の〈王〉字

甲骨文（第二期）



金文（殷・小臣觶簋尊）



このように甲骨文では、媒材の物質的特性のために、字画の構成が簡略化され、金文よりも抽象的な記号に一步近づくことになりました。したがって、中国の文字学者の裘錫圭は、「甲骨文は当時における一種の比較的特殊な俗体とみなすことができる。そして、金文はほぼ当時の正体とみなすことができる」というのです。③

甲骨文と金文の差異は、両者が拠って立つ媒体の物質性に由来するといえます。そして、両書体の名称自体——後世の人が名づけたものですが——そのことを物語っています。重要なことは、殷代にすでに複数の書体が併用されていたこと、それらが書写媒体に結びついてしたこと、さらに正体と俗体のような階層性があったということです。

### 三 金石に刻まれる篆書

甲骨文・金文にもいえることですが、そもそも篆書は筆で書かれることを前提とした書体ではありません。『墨子』明鬼篇下につきのようにいいます。

むかし、聖王は必ず鬼神〔死者の霊、先祖の霊〕は存在するものだとして、鬼神のために手厚くつとめた。しかもなお、後世の子孫がわからなくなることを恐れたために、それを竹帛ちくおくに書きしるして後世の子孫に伝え残した。また、その竹帛では腐ったり虫がくっついたりして絶滅し、後世の子孫がわからなくなることを恐れたために、それを盤ばんや孟もうの器に彫りつけ、金石に鏤きざんで、念入りにした。<sup>(一)</sup>

ここには、古代の書写メディアが、どのような目的で使い分けられていたかが説かれています。「竹帛」とは、竹簡と絹布、耐久性の低い媒材です。それに対して、「金石」は金属と石、硬く耐久性の高い媒材です。青銅や石は、祭祀儀礼の場において、恭しく掲げられ

るモニュメントに使われました。「竹帛」は朽ちやすいため、半永久的に伝えるメディアとして「金石」に文字を刻んだのです。「竹帛」が筆写のためのメディアであるのに対して、「金石」は文字を「彫りつけ」「鏤む」ものです。篆書は、金石に刻むための書体にほかなりません。

後述するとおり、戦国時代、東方の文化的先進地域では新しい筆写体が広く行われていたにもかかわらず、秦は西周以来の文字の伝統を受け継ぎました。戦国時代に入ると、他国では新しい様式の金文があらわれ、次第に粗雑化・装飾化の方向に進みます。器面に直接鏤かえで彫りつけた刻銘が多くなると同時に、実用通行書体である筆写体を金文に用いるケースも散見されるようになりますが、秦は西周金文の様式を墨守しようです。秦はもともと西北に位置した後進国で、西周の故地を継いで、その文化をもっともよく保存したからです。たとえば『秦公簠』<sup>（二）</sup>は春秋中期ごろの秦の金文ですが、その様式は西周後期の金文と共通しています。ただし、その銘文はスタンピングを押し当てるようにして作られた跡がみられ、同じ文字は全く同形になっています。これも金文の衰退を示す兆候とみてよく、金文の時代が終わりつつあることを示しています。秦において、青銅器に代わって重要な意味をもつメディアとして登場したのが石だったように思われます。

石刻の書は、中国書道史の全体から見ても非常に重要な位置を占めています。しかし、秦の中国統一以前、石に文字を刻むという文

化はほとんど見られません。古くは殷の婦好墓から出土した玉器などに刻まれた文字の例があるとはいえ、春秋戦国時代を通して、《石鼓文》を除くと、微々たるものしかありません。しかし、秦の中国統一の際に始皇帝が各地を巡幸して立てた七つの刻石にはじまり、つづく漢代以降、石刻の書が数多く作られ、主要なメディアとして確固たる地位を築き上げることになります。その端緒を開いた作品が《石鼓文》といつてよいでしょう。

《石鼓文》(図4)は、推定製作年代に諸説ありますが、春秋戦国時代の秦で作られた石刻の文字資料で、西周金文に由来する曲線を多用した書体が用いられています。堅緻な石に曲線を刻むのは容易なことではなく、石刻技術が高度に発達していること物語っています。

図4 石鼓文(秦/大篆)



大篆に比定される《石鼓文》を経て、統一後の《泰山刻石》(図5)や《琅邪台刻石》にみられる小篆に至る道筋を辿ると、象形性の色濃かった金文が、石に刻まれることによって、点画の肥瘦が消え、抑揚のない幾何学的な線に整理されてゆく過程が見取れます。すなわち、篆書の変遷過程は、青銅器から石へという媒体の変化

に対応するといえます。先にも述べたとおり、金文は粘土で型をつくるため、細かい整形が可能です。そのため肥筆を多用し、象形性を色濃く留めています。しかし、金文をそのまま石に刻むことはできません。そこで、金文の字体をベースに、曲線を基調としながら、肥瘦を省いた均質な線によって幾何学的に再構成して大篆が作られ、さらにそれを整理して小篆が成立するのです。

図5 泰山刻石(秦/小篆)



#### 四 筆写体としての楚系文字と隸書

春秋戦国時代に漢字をめぐる状況は大きく変わります。文字が広まり、さまざまな目的に用いられるようになってくるとともに、文字が書き記される媒体も多様化します。また、周王朝の力が弱まり、諸侯が独立性を強めていくと、文化に地方性が生じ、書体も多様化することになります。

殷周時代では、国家の中枢における儀礼的な目的に限定的に使用されていた文字が、この時期になると、外交・経済・言論といった諸活動に広く使われるようになりました。人々が日常的な筆記を行うためには、安価で大量に消費可能な媒体が必要になります。それ

が簡牘かんこくとよばれる竹や木の札です。簡牘こそ、紙の発明以前、人々が日常的に消費していた最も手近な書写材料です。ちなみに簡牘は、本来、竹が主な材料であり、木は竹の生育しない地域で用いられた代用品です。幅約一センチの細長い札の形式は、竹を割って加工したことに由来するもので、もともと木を使っていたら、こんなに幅を狭くする必要はないからです。

出土資料として最古の簡牘は、戦国時代初期のものです。簡牘は朽ちやすく、特殊な条件が揃わないかぎり土中で分解されてしまいます。ですから、春秋時代以前のものが見つかっていないほか、戦国時代以降のものでも、特定の地域からしか出土していません。しかし、簡牘は、殷代にはすでに使われていたと考えられています。というのも、甲骨文や金文にみえる〈冊〉の字が、細長く切り揃えた竹の札を並べて紐で綴った簡冊かんさくの象形字と考えられるからです。

とはいえ、やはり、春秋戦国時代の簡牘の使用は、殷代とは比べものにならないほどの規模に拡大したと思われます。それにともなつて、二系統の実用通行書体があらわれます。そのひとつが、おもに南方の大国、楚の地域から出土する簡牘。帛書にみえる文字で、楚系文字と呼ばれる文字です(図6)。点画の形状は、鋭く抜き放つ収筆が、毛筆固有の特徴をはっきりと示しています。一本一本の筆線は、円転の筆づかいを基調として、弧形を描きます。斜めに傾く文字の概形は、速書きの習慣が様式化したものです。いずれも、毛筆による実用書体としての特徴です。

図6 郭店楚簡(楚／楚系文字)



楚系文字は、楚だけで用いられていたわけではありません。というのも、南方の楚から遠く離れた東北地方、山西省侯馬市の春秋時代後期の晋の遺跡から出土した肉筆文字資料《侯馬盟書》と書体的な共通性があることから、戦国時代には西方の秦をのぞく広域で用いられていた筆写体であったとみられます。楚系文字は、伝統的に「古文」と呼ばれてきた書体に相当すると考えられ、後述する隸書以上に簡略化が進んだ書体です。これほど進んだ段階にあった楚系文字ですが、秦の文字統一によって減じてしまいます。もし秦が中国を統一しなかったら、漢字は楚系文字の系譜において変化したはずで、いまのわれわれの使う漢字とはまったく異なる姿になっていたにちがいません。

一方、戦国時代の秦で行われた筆写体として誕生したのが隸書(秦隸)(図7)です。隸書は、のちの草書・行書・楷書といった書体の母体となる書体です。隸書は、戦国時代の秦において、法治による富国強兵を唱えた商鞅の変法と軌を一にしてあらわれます。上意下達の官僚制にもとづく中央集権的な国家運営を行うために、大量の文書を作成する必要が生まれました。こうした文書行政に篆書のよ

うな複雑な文字は適しません。そこで効率的に書くことができる実



用書体として考案されたのが隷書でした。

図7 睡虎地秦簡(秦/秦隸)



隷書は、篆書の筆画を省略し、曲線を多用する篆書の字画を直線の組み合わせで再構成することによって成立した書体です。金石に刻むための書体である篆書に対して、隷書は、簡牘に筆で書くことに最適化された書体です。列国で用いられた楚系文字に相当する筆写体といえます。

篆書から隷書への変化を「隸変」と呼びます。大西克也氏は、「筆画の符号化」がその本質であると述べています。「隸変の結果、曲線的で複雑な篆書は解体され、象形的含意は失われて幾何学的な色彩が強くなる。また、本来は別の源を持つ字や構成要素の合流も生じる」<sup>(3)</sup>。しかし、同様の現象がすでに甲骨文や楚系文字にも生じていることに注意すべきです。両者とも、「象形的含意は失われ」、「筆画の符号化」が起きているといえるからです。これらはむしろ、より普遍的に通行体・俗体・筆写体の特徴といえるべきでしょう。ただ、隷書がその後の草書・行書・楷書の母体となるため、特別に重視されるのです。

こうして、隷書以降の字形から文字の象形的起源を想像すること

は、もはやほとんど不可能になりました。また、文字の書き手も、そのような知識を失っていました。漢字がもっていた古代的な神秘性や呪術性のようなものが、隷書によって失われたわけです。それはまた、人間と文字の関係を変えたといえます。聖性を失った文字は、世俗的(secular)な目的に使うことができる道具となります。その意味で、「隷書」という名称自体が象徴的です。隷書の名称の由来をめぐってはさまざまな説がありますが、正式書体である篆書に対して卑俗な書体とみなされたことを暗示しています。

## 五 書体の昇格

正体と通行体・俗体といった書体の階層性について、いまひとつ注目したいのは、正体と通行体の組み合わせが時代によって変化することです。秦では、正体として小篆、通行体として隷書が併用されました。つぎの漢代になると、隷書が正体となり、通行体として隷書を速書(すさ)した草隸(行書の祖型)や草書(章草)があらわれます。南北朝の頃には、楷書が正体となり、通行体や俗体として行書や草書(今草)が広く用いられるようになります。

ここで興味深い現象が、書体の昇格です。図2に示したように、通行体の位置から、正体に格上げされた書体があることがわかりますね。隷書はそのような書体です。

統一後の秦では、正体として小篆が定められました。皇帝が各地を巡幸して立てた刻石や、度量衡の統一のために各地に配付した標

準器に刻まれた文字です。しかし、小篆は、幾何学的にデザインされた文字で、日常的な筆記に適した書体ではありません。このため、実用書体として隷書が普及しました。

ところが、秦が滅びて漢王朝が成立すると、もともとは実用書体であった隷書が正式書体に昇格します。篆書は、印章や碑の題額として、特殊な目的にのみ用いられる書体となります。

隷書が正体に格上げされることによって、ふたつの現象が起こります。ひとつは、隷書が正体にふさわしい姿に変貌したことです。それが収筆を大きく払い出す波磔はたつをそなえた八分(図8)と呼ばれる書体です。もうひとつは、隷書の昇格によって空席となった実用書体の座に、新しい書体が生まれたことです。こうして誕生したのが初期の草書である章草(図9)です。さらには、隷書の速書き(草隷)から、のちに行書が生まれることとなります。

図8 礼器碑（後漢／八分）



図9 馬國灣前漢簡（前漢／章草）



つづく三国時代には楷書が成立します。従来、楷書は隷書から変化したものでたと説明されてきましたが、直接的には行書に由来するとみるべきです。伏見冲敬は、三国から西晋あたりの書体の様相について、つぎのように述べています。

「銘石の書」としては最も謹厳な隷書が用いられ、また日常は意味が通じればよい、筆画を省いた行書や草書が行われていたが、銘石の書ほど改まらないものの、さりとてあまり軽々しくない、現在のペン字の丁寧なのにあたるような文字として楷書が用いられはじめたのではあるまいか。大量の経文などを写すのに、とてもいちいち昔風の字など書いてはいられない、さりとて続け字は困る、そこで折衷してこんな風にしたのだと思う。だから、楷書は隷書の波磔（波磔）を省いたものと考えるのは間違いで、むしろ行書を整齐にしたものと見た方がよからう。<sup>6)</sup>

たとえば、隷書では筆画は水平垂直を原則に構成されるのに対して、楷書では縦画が左に傾き、横画は右肩上がりになるのが基本です。それによって、楷書の概形は斜めに傾くこととなります。これは、隷書ではなく、行書の結体に由来するものです。また、楷書に散見する跳ねや、収筆を細く払い抜く筆画の筆法も、隷書には存在せず、行書に由来するものです。したがって、楷書は「行書を整齐にしたもの」と考えるべきであり、その意味で、行書が正体化したものだといえます。



ただし、楷書が成立したからといって、すぐに楷書が隷書に代わって正体の地位を獲得したわけではありません。三国から西晋の碑には、あいかわらず隷書が用いられているからです。両時代において、なお隷書が正体とみなされていたことがわかります。石刻の書は、その時代の正体を示す指標なのです。

## 六 石刻と正体化

ここで、通行体から正体への書体の昇格にともなう整齐化について考えてみたいと思います。すでに秦隸が正体に昇格して八分となり、行書が正体に昇格して楷書となったと述べてきました。両書体とも、正体化にともなって、整齐化と装飾化が起こつています。その動機が、正体にふさわしい權威性を付与するためであることはいうまでもありません。しかし、正体化にともなう書法の様式化に大きな役割を果たした要因として、石刻の存在を無視することはできません。まずは、簡単に石刻の書の歴史を概観しましょう。

すでに触れたとおり、石に文字を刻すことは、春秋戦国時代の秦の《石鼓文》が古い例です。中国統一後の秦の始皇帝が各地を巡幸して立てた七つの刻石に篆書の典型である小篆で文字が刻まれて以降、石はつねに正式書体が刻まれる媒体となります。

前漢には、碑のような一定の形式が未成立ですが、さまざまな形体の石に文字を刻むことが広くみられるほか、天然の岩肌を削って文字を刻した摩崖まがいの例もあらわれます。後漢になると、死者の生前

の事跡を記した墓碑をはじめ、さまざまな記念碑が数多く立てられます。さらに、国家公認の経書のテキストを公に広めるために石に刻した《熹平石經》がつくられてもいます。「石經」は、その後も、三国魏の《正始石經》、唐の《開成石經》など、歴史を通して幾度かつくられることになります。

およそ後漢末から紙が書写材料として普及しはじめ、つぎの三国時代には簡牘に代わって紙が主要な書写材料となります。それ以降も、石に文字を刻すことは唐代末までさかんに行われました。魏の文帝が命じた立碑の禁以降、六朝時代には、地上に立てる碑に代わって墓中に埋める小型の墓誌が数多くつくられます。北朝では、龍門石窟の造像記や碑誌、摩崖など、南朝以上に石刻の書が盛んになります。南北の統一を経た隋唐の時代になると、ふたたび碑を立てることが流行し、墓誌と並んでたくさんの方の遺例があります。ところが、宋代以降、こうした流行が去り、石刻の遺例は一気に減ることになります。

石刻書が宋代以降衰退した理由のひとつに、印刷技術の発展があると思います。唐代後半には、木版印刷によって、書物を安価かつ大量に複製することが可能になりました。それまで書物はすべて、職人の手によって一字一句書写された写本でした。写本は、どれほど慎重に校訂したとしても、誤字や脱字を免れません。そのような写本の時代において、石經のような石に刻まれたテキストは、絶対的な典範として存在していたはずで、碑の拓本をとることがいつ

から行われたのか定かではありませんが、最古の拓本の遺例に敦煌の藏經洞で発見された唐太宗の《温泉銘》があることから、六朝期には行われていたとみられます。木版印刷技術によって、こうしたテキストの典範としての石刻書の役割が終わったのです。

歴史を通して変わることのない石刻書の特徴は、各時代の正体によって文字が刻されるということです。唐代には、行書や草書の碑の例がありますが、あくまで例外です。各時代の石刻の書をみれば、当時の正体のすがたを知ることができます。

さて、以上のような石刻の歴史を踏まえた上で、あらためて、書体の変化における石刻の役割について考えてみましょう。

隸書は、前漢後期頃、秦の隸書様式を継ぐ秦隸（古隸）から、波磔をそなえた八分へと変貌します。そのときに重要な役割を果たしているのと考えられるのが石刻です。通行体から正体への昇格にもなつて、様式的な整齊化・装飾化が生じます。それは、筆写体から銘石体への変化といつてよいものです。

石に文字を刻する際には、書人が朱墨を用いて肉筆で碑面に下書き（書丹）した後、石工の彫刻を経て、最終的な字姿が完成します。毛筆で書かれた筆画は、彫刻の意匠によって修整を加えられることになります。柔らかく円味を帯びた毛筆のニュアンス（筆意）が、石に刻まれることで失われたり、変質させられたりするわけです。とりわけ正体としての威厳や整齊を志向する場合には、筆跡の忠実な再現よりも、石刻の意匠が優先されることがあります。こうして

起筆や収筆のかたちが整えられたり、装飾的な表現が加えられたりします。八分の様式は、このようにして整えられていったと考えられます。

たとえば、後漢末の《張遷碑》（図10）は、筆画の両端を角張らせて方形にし、点は三角形に整えられています。こうした四角形の字画や三角形の点を毛筆で書くことは不自然かつ困難です。したがって、《張遷碑》のような八分様式は、毛筆による「筆法」以上に、「刻法」によるところが大きいといわなければなりません。われわれは、書として肉筆を重視してしまいがちですが、石刻においては、石に彫られた姿こそが最終的な完成形です。このような石刻独自の様式は、銘石書とも呼ばれるものですが、正体化の要求によって生じたものと理解することができます。人々は、石に刻まれた八分の姿を基準とすることで、肉筆の書の表現も、前者に近づいていくことになります。つまり、あくまで石刻上の表現であった刻法が、肉筆の筆法に環流してくるのです。こうして、肉筆でも石刻に近い表現がなされるようになります。

図10 張遷碑（後漢／八分）



当時の人が、銘石書をひとつの独立した様式としてとらえていた

ことは、つぎのような文献上の記述によつて裏づけられます。鍾繇は、三国魏の宰相であり、楷書の名人として名を残している書人です。王羲之が書名を確立する以前、もっともその名が高かった人物です。

鍾繇の書に三体がある。一つに銘石書といわれるもので、最もすぐれたものである。二つに章程書といわれるもので、世々秘書の官に伝えて小学を教えたものである。三つに行狎書ぎやうしやといわれるもので、ご機嫌伺いの手紙に用いるものである。これら三つの書法は、すべて当時の人々のほめるところであつた。<sup>(7)</sup>

ここで重要なのは、鍾繇が三つの書体を書き分けていたということです。「銘石書」は八分、「章程書」は楷書、「行狎書」は行書に対応すると考えられます。すなわち、「銘石書」という呼称は、石刻専用の書体として、筆写体である楷書や行書と区別されていたことを示しています。

漢が減びると、筆写体としての隷書は急速に衰退していきます。そして、隷書に代わつて新しい楷書が行われるようになります。その理由についてはあとで検討することにして、注意すべきは、日常的な筆記に隷書を用いることがほとんどなくなったにもかかわらず、石刻の上ではしばらく隷書が生き延びたという事実です。

三国から西晋にかけて、肉筆の文字資料にみられるように、すっかり新しい感覚の楷書や行書が広く用いられていたにもかかわらず、石刻においては、いまだ古めかしい隷書にもとづく銘石書が使われ

続けました。しかも、だんだんと本来の隷書から離れ、しまいは東晋の《爨宝子碑》<sup>(8)</sup>（図11）のような奇妙なすがたになってしまいました。

図11 爨宝子碑（東晋／銘石書）



それは、隷書を書く習慣がすっかり失われ、銘石書が観念的なものになっていったことのあらわれです。

たとえば、東晋に活躍した王羲之は、行書や草書の典型的書法を確立し、後世に絶大な影響をあたえた書人です。二〇世紀、王羲之と同時代の人物で羲之の親族でもある人物の墓が発掘され、そこから見つかった墓誌に刻まれた書体の奇妙なすがたが話題となりました。

そのひとつである《王興之墓誌》<sup>(9)</sup>（図12）の書体は、一見して隷書とも楷書ともつかないものです。発見当時は、肉筆の出土資料を見ることができなかったため、これは隷書から楷書への過渡的な書体であると考えられました。郭沫若<sup>(10)</sup>という学者は、同墓誌を根拠のひとつとして、王羲之の《蘭亭序》偽作説を唱えたほどです。両者にみえる書体があまりにもかけ離れているため、王羲之が《蘭亭序》のような書を書いたはずがないと考えたのです。

図12 王興之墓誌（東晋／銘石書）



しかしそれは、石に文字を刻むときと、日常的に紙に書くときとは、異なる書体を用いるのが当然であるという当時の書体意識を理解していないことによる誤解でした。

王羲之の生きた東晋の時代においても、石刻には古めかしい隸書を用いるものだというのが、当時の人々の書体意識でした。石刻には、専用の銘石書を用いるのが常識であると認識されていたのです。

しかし、すでに楷書や行書が広く用いられ、隸書を日常的に使う時代は遠く過去のものとなった当時において、漢隸の筆法はすでに失われていました。手にしみついた楷書や行書の筆法が、古い隸書を書こうとしても、影響を与えないはずはありません。こうしてできあがったのが、このようなぎこちない銘石書なのです。波勢という隸書のリズムを失っているため、点画は不自然にみえます。その上、刻法による潤色も加わって、なおさら不自然なすがたとなってしまうです。

## 七 紙と楷書・今草

先述のとおり、楷書は三国時代頃に成立しました。それとほぼ時を同じくして、新しいメディアが登場します。すなわち、紙です。

紙の登場によって、それまで最も手近な書写材料であった簡牘に代わって、安価な使い捨てのメディアとして普及することになります。

前漢の地図や文字が書かれた紙の断片が出土していることから、紙は後漢二世紀初頭の蔡倫より二百年以上前に存在していたことが知られます。また、後漢の時代には、ある程度書写材料としての紙が普及していたことが文献からも窺えます。たとえば、後漢・崔瑗<sup>さいえん</sup>の尺牘<sup>せきとく</sup>（手紙）として、『許子』十巻を送るのに、貧しくて帛に書写することができないので、紙でご勘弁ください』（『芸文類聚』巻三十一所引「葛元甫に与うる書」という旨の記述があります。高価な帛の代用品として、紙が使われ始めたことを物語るものです。

これは、蔡倫が活躍した時期とも重なります。安定した品質を保ちながら、安価かつ大量に生産できるような工夫が加えられることによって、はじめて紙は簡牘に代わる日常的な書写材料となることでできたはずです。蔡倫は製紙技術の改良に大きな貢献をした人物として、歴史書にその名が記されているのです。

さらに西晋になると、左思の文学作品「三都賦」が評判になり、洛陽の紙価が高騰した（『晋書』文苑伝）という有名な故事も伝わります。この頃には、書写材料としての紙が一般に普及していたことを物語るものです。簡牘から紙への転換は、三国から西晋にかけて進み、東晋ではほぼ紙に置き換わったとみられます。

紙の普及と時を同じくして登場したのが楷書、そして今草です。主要な書写材料の変化とともに、新しい書体があらわれたことは偶

然ではなく、両者のあいだの結びつきを示唆しています。

この書法の変革の由来を、簡牘と紙という書写材料のちがいに帰した伏見冲敬の説明は、卓見といえます。かれは、漢代の墓壁画に描かれた官吏が、左手に簡牘を持ち、右手に筆をもっている執筆姿勢について、つぎのように説明しています。

木簡はこうして手に持って書いたのであろう。すると、筆はおのずと木簡に垂直に当たるように持つことになる。三国時代あたりから紙が普及すると、机上に広げて書くから筆は斜めに当たる。この筆の当たる角度の変化が書法の変化をもたらすことになったと思われる。<sup>8)</sup>

簡牘に文字を書くとき、机は不要です。実際、漢代の墓壁画には、文字を書く官吏のすがたが描かれています。いずれも机はありません。簡牘は、手に持って書くものであり、机上に置いて書くものはなかったのです。

他方、紙は薄く、柔らかいため、丸めたり、折り畳んだりすることが可能です。竹や木に比べて、よほど繊細で脆い物質です。紙に文字を丁寧な書こうとするならば、机上に置いて書くことになりました。

このようにして、隸書と楷書の基本的な筆法のちがいが生まれます。すなわち、隸書では起筆で筆鋒を隠す「藏鋒」を基本とするのに対し、楷書では起筆で筆鋒をあらわにする「露鋒」を基本とします。前者の起筆は丸く膨らんだかたちになり、後者の起筆は鋭く尖っ

たかたちになります。このちがいは、左手に持った簡牘と机上に置かれた紙に対して、筆が当たる角度がそれぞれ異なることに起因するのだ、ということです。左手に持った簡牘には、筆が垂直にあたることによって藏鋒となり、机上に置かれた紙には、筆鋒が斜めに当たるため、鋭く尖った筆先があらわになるわけです。

また、章草から今草への変化も、紙によって説明可能です。簡牘、とりわけ竹は、吸水性が低いため、粘度の高い濃墨で書く必要があります。紙は平滑で、吸水性に富むため、水分の多い墨で書くことができます。さらさらと縦に流れるように書かれるようになり、章草にはなかった連綿（文字と文字のつづけ書き）がおこります。また、竹簡や木牘がかぎられた幅しかとれず、一行ないし数行しか書くことができないのに対して、紙では大きく広がった紙面に多数の行にわたって書写することが可能になります。一行を揃えて書く必要も、行をまっすぐ揃える必要もなくなります。字の大小、行の揺れ、傾きなどの変化があらわれ、紙面の空間を面的にとらえる章法の工夫が自由になったのです。こうした紙の特性を最大限活かして新しい典型的書法を築き上げたのが王羲之といつてよいでしょう。

## 八 石と楷書

私は先に、楷書は紙の登場とともに出現したと述べました。しかし、最後に論じたいのは、石と楷書の関係です。

楷書が誕生したばかりの三国から西晋あたりまで、碑誌には依然

として隸書が用いられたことを説明しました。それが、南北朝時代を経て、隋唐に至ると、石刻はすっかり楷書が占めるようになります。そして、楷書の書法的典型が確立するのが、この時期です。すなわち、楷書が三世紀に産声を上げてから、六・七世紀に典型が確立されるまで、三、四百年の時間が必要だったことになります。ただし、それよりも少し前、南朝の宋・齊の頃には、楷書を「正書」とか「真書」と呼ぶようになっていきますので、すでに楷書が正体として認識されていたものとみられます。ちなみに、「楷書」という書体名が定着するのは、ずっと後の北宋の時代であり、唐代ではややこしいことに「隸書」と呼ばれていました。

古典書論においては、先にも触れた魏の鍾繇が初期の楷書の名手として高く評価されています。しかし、残念ながら、鍾繇の楷書として伝わる作品は、かなり後の時代につくられた刻帖に収められたものしかなく、どれほど信を置けるかわかりません。それでも、鍾繇を学んだ王羲之、その息子の王献之、そして王氏の血筋を引く齊の王僧虔、隋の智永といった書人の楷書作をみると、やはりひとつの楷書の系譜が浮かび上がってきます。それは、東晋の後、中国が南北に分かれてそれぞれ皇帝を戴いた南北朝時代において、南朝系統の楷書です。

南朝系の楷書は、やわらかく、行書の筆意（行意）を多分に帯びています。概形は扁平気味で、右肩上がりの傾きはおだやかです。起筆・収筆や転折部での筆の突き込みは弱く、行書と明確に区別さ

れていなかったようにみえます。たとえば王献之の《廿九日帖》も楷書の筆法を基調にして書かれていながら、行書や草書がごくあたりまえのように交ぜ書きされています。また、智永の《真草千字文》の真書（楷書）の例（図13）も行意が多く、楷書としてはルーズな書きぶりです。しかし、そう見えるのは、われわれが抱く楷書のイメージが唐楷を基本にしているからです。南朝の人々の認識からすれば、楷書はかなり行書に近いものであって、しばしば両者の区別は曖昧でした。南朝の人々にとって、楷書は石に刻すものではなく、主に紙に書く筆写体だったのです。ですから、行書に近いのもあたりまえです。そもそも、行書を整齊に書くことから楷書が成立したのでした。

図13 智永・真草千字文（隋／楷書）



このような南朝系の楷書に対して、北朝系の楷書のほとんどは石刻として伝わります。南朝では石刻の遺例がきわめて少ないのに対して、北朝では石刻が大変盛んでした。北魏の孝文帝が開鑿した龍門石窟の造像記（図14）や墓誌をはじめとして、北魏の楷書は石刻の存在を抜きにして語ることができません。



図14 始平公造像記（北魏／楷書）



北魏の楷書は、鋭く角張った点画が石刻の特徴をはっきりとあらわしているのをはじめ、右肩上がりの傾きがきつく、文字の重心を左下にかけます。また、収筆に波磔の気味が残っていることが多くあります。刀意を前面に出す彫刻的表現が志向され、毛筆の柔らかさを表現しようとする意図は稀薄にみえます。

澤田雅弘氏は、六朝から隋唐の墓誌を多数検討し、肉筆の楷書とは異なる、刻法の自律性について論じています。<sup>③</sup> すなわち、起収筆、転折、跳ねや払いといった楷書の点画をどのように刻すかという刻法が、下書きをした書丹者の肉筆の筆法とは別の次元に存在し、石刻書の重要な表現を担っているという事実です。われわれの文脈では、隋唐に完成する楷書の典型的様式に、石刻の刻法が大きく影響していることの傍証とすることができそうです。

これら南北の両系統が融合して隋唐の楷書の典型が確立するのですが、両者の書風のちがいは、何よりも紙と石という書写メディアの差異に帰せられます。つまり、大きな流れとして見れば、そもそも行書に由来する紙の上のやわらかい楷書が、石というメディアによって硬質化し、隋唐の楷書の典型が完成したといえます。石刻が

楷書の筆法の規範化の上で重要な役割を果たしたのです。

最後に、漢字書体の変遷が楷書の成立をもって終息した理由について、私見を述べておきます。それは、紙に代わる新しい書写メディアが出現していないからではないでしょうか。今日のわれわれも、電子媒体を別にすれば、文字を書きしるすメディアとして、なお紙の時代に生きているといえます。そのことは、紙の普及とともに登場し正体となった楷書を、今なお標準書体とみなしていることともつながっています。書体の様式は書写メディアの物質的特性に規定されていると考えるならば、楷書に代わる書体がいずれあらわれるのは、紙に代わるメディアが登場したときだと予言することができます。ただし、そのときに、まだ人類が手で文字を書いていれば、の話ですが。実際、今日多くの人々は、もう文字を手で書かなくなりつつあるのですから。

## 注

- (1) 松丸道雄「殷周金文の製作技法について」『中国法書選ガイド1 甲骨文・金文』二玄社、一九九〇年。
- (2) 山本堯・樋口陽介「殷周金文の復元鑄造」『金文—中国古代の文字—』泉屋博古館、二〇一九年。
- (3) 裘錫圭『文字学概要』修訂版、北京・商務印書館、二〇一三年、四八頁。邦訳『中国漢字学講義』稲畑耕一郎ほか訳、東方書店、二〇二二年、八四頁。訳文を一部改めた。
- (4) 金谷治訳『墨子』中公クラシックス、二〇一八年、一〇一—一〇二頁。訳語を一部改めた。

- (5) 大西克也・宮本徹『アジアと漢字文化』放送大学教育振興会、二〇〇九年、一一九頁。
- (6) 伏見冲敬著・筒井茂徳補『新訂 書の歴史 中国篇』二玄社、二〇一五年、六六頁。
- (7) 羊欣『古来能書人名』吉田教專・神谷順治訳、『中国書論大系』第一卷、二玄社、一九七八年、一四九頁。訳文を一部改めた。
- (8) 伏見冲敬著・筒井茂徳補、前掲書、二五頁。
- (9) たとえば、楷書の横画の取筆で筆を押さえて三角形につくる筆法は、『筆跡に從属しない自律的刻法』に由来するという(澤田雅弘「隋代墓誌刻法における楷書取筆の新表現―太僕卿元公墓誌以前の三角形取筆について―」『大東書道研究』第二四号、大東文化大学書道研究所、二〇一七年、五二頁)。

# 参考文献 (注に示した文献をのぞく)

- 阿辻哲次『図説 漢字の歴史』大修館書店、一九八九年
- 魚住和晃『書聖王羲之―その謎を解く』岩波現代文庫、二〇二〇年
- 亀澤孝幸『書写材料と漢字書体』中国国家文物鑑定委員会編／亀澤孝幸監修・翻訳『中国文化財図鑑 第六卷 文房具』科学出版社東京、二〇一六年
- 何琳儀『戦国文字通論 訂補』上海古籍出版社、二〇二一年
- 啓功『古代書体論稿』北京・文物出版社、一九六四年
- 西林昭一『書の文化史』上、二玄社、一九九一年
- 福田哲之『書体の系譜』、角井博編『決定版 中国書道史』芸術新聞社、二〇〇九年
- 横田恭三『戦国秦・漢初における書体の変遷―秦隸・草隸の発生をめぐって―』『書論』第四〇号、書論研究会、二〇一四年

(かめざわ たかゆき・本学特任講師)